

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 石尾健一郎

本研究は、流涙や眼脂を主訴とする鼻涙管閉塞症や慢性涙嚢炎の手術療法を、より安全に、より容易に、より確実に、より少ない侵襲でいかに成功させるかの観点から考案した内視鏡下鼻内涙嚢鼻腔吻合術（以下、内視鏡下鼻内 DCR (dacryocystorhinostomy)）について、その術式、工夫、当施設における臨床成績を紹介し、臨床的な評価に基づき、その有用性の検討を行なったものであり、下記の結果を得ている。

1. これまで行われてきた代表的な手術療法である鼻外法 DCR は顔面の皮膚切開を必要とするため、顔面の癒痕や時に顔面創部のしびれ感が生じる欠点があり、「顔面に傷が残る」、「術後に疼痛がある」等を理由に手術を躊躇する例も少なくなく、また従来 of 鼻内法 DCR では術野が狭く視野が悪いという欠点があったが、内視鏡を利用することでこれらの問題を解決することができた。
2. 以下の点を工夫することにより minimally invasive surgery を可能にした。
 - 1) 涙小管の保護
 - 2) 鼻内から涙嚢部を同定、確認する際のライトガイドの使用
 - 3) 出血の軽減を目的とした機器の利用
 - 4) 涙嚢（内腔）をより確実に開放するための色素の利用
3. 鼻涙管閉塞症の治療を目的に内視鏡下鼻内 DCR を施行した患者 21 例、24 側を対象に行なった診療記録と電話インタビューによる術後経過・成績につ

いての調査では、本術式は疼痛や出血が少ないこと、術後に顔面の腫脹、瘢痕が生じないこと、術後短期間に症状が消失するという利点を持ち、術中、術後に重度の合併症や続発症は発生せず、対象としたすべての症例で症状の改善を認め、高い満足度が得られた。

4. 過去に報告された鼻外法の術後成績との統計学的な比較検討では、両術式間に統計学的有意差を認めず同等の治療効果が得られ、これに加え顔面への皮膚切開を必要としないことも考慮すると、臨床的な有用性は高く、手術療法として汎用されるに足る術式であり、minimally invasive surgery を目標とした医療の観点からも本術式の必然性は十分に認められた。

5. 疾患の性質上、根治性に重点をおき機能を犠牲にせざるを得ない治療が必要な症例に対しても、治療中あるいは治療後には機能回復を目的とした処置や治療が望まれる時代が到来しており、今後その重要性、必要性は増すばかりであると考えられ、導涙障害をもつ患者の治療がより安全に、より容易に、より確実に、より少ない侵襲で行えるよう治療法が進歩していくことが重要であると考えられる。

以上、本論文は鼻涙管閉塞症や慢性涙嚢炎の治療を目的に施行する手術療法において、minimally invasive surgery を目標として考案した内視鏡下鼻内涙嚢鼻腔吻合術の臨床的な有用性を明らかにした。本研究は鼻涙管閉塞症や慢性涙嚢炎の治療に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。